

学校を「教員が学びあうコミュニティ」に変える

神奈川大学教職課程 入江直子

文部科学省は「平成 20 年度 教育職員に係る懲戒処分等の状況について」を発表したが、その中で「病気休職教職員数が過去最多で、このうち精神疾患が 63%でやはり過去最多」「各教育委員会の聞き取り調査では『教員同士のコミュニケーションが少なく相談相手がいない』といった訴えが目立った」と報告している（2009.12.26 朝日新聞）。

私は、私学の社会教育課程と教職課程の仕事をしているが、昨夏、教員免許更新講習に取り組んだ。いわゆる「必修 12 時間」である。その中に何とか「ラウンドテーブル」を取り入れたいと思い、2008 年夏に福井大学の「予備講習」に通い、ノウハウを学んだ。以下が収穫のポイントである。①全体を少人数グループに分け、グループ支援者を配置する。②「必修」で扱うべき 4 項目の 1 つである「教職についての省察」は「ラウンドテーブル」方式でできる。③その他の 3 項目については、コンパクトな講義をして、その中から問を出して意見を書いてもらうという方式で、講義資料も含めて証拠資料にする。（「必修 12 時間」しか枠がなかったので、福井大学が中心に据えていた「書く」は参考にできなかった。）

手に入れたノウハウによって計画を進めた。定員を 100 名にしたので、1 グループ 5 名として 20 名のグループ支援者が必要となったが、幸い、教職課程専任教員 7 名＋非常勤講師（校長 OB 等）7 名＋卒業生教員 7 名、計 21 名を確保することができた。「教職についての省察」については、受講生が「自分の教職生活のふり返り」を語り、聴き合うかたちを計画したが、その意味を理解してもらうために、5 月にグループ支援者が集まって「ラウンドテーブル」を試みた。とてもいい反応で「面白い」ということであった。

受講生は、教員の年齢構成に比例して、50 代が約 50%、40 代が約 20%、30 代が約 30%であった。そこで、性別・年齢・校種を混ぜ合わせたグループ編成をした。こうしたグループで「自分の教職生活のふり返り」を語り、聴き合った「ラ

ウンドテーブル」の感想には、次の 3 点が多かった。①他の校種の話は、あまり聞いたことがない、教育委員会の研修では扱われない。②置かれている環境が違っても、教員はみんな子どもたちと真剣に向き合おうとしている。③これからの教員生活で何か目標を立てて頑張っていこうという気になった（特に 50 代の受講生）。以上のように「ラウンドテーブル」は、自分の教職生活を省察し、互いに共有することができ、今後を展望しようとする場になったと思われる。

このような「学び」を「ラウンドテーブル」がつくり出す力となったのは、グループ支援者の存在である。初対面の受講生同士が自分のことを話しやすいようにいろいろ工夫し、よく聴いていた。事前の「ラウンドテーブル」で、自分の教職生活を語り、聴き合った経験が、よいグループ支援をつくり出したのではないかと思われる。私は、このことを通して、自分の実践の省察によって形成された力が、「学びあうコミュニティ」をつくり出す「コーディネーター」の力になるということを実践的に理解することができた。

教員が自分の実践の省察を語り、聴き合うことで力をつけることができるような「学びあうコミュニティ」に学校を変えていくことができれば、「教員同士のコミュニケーションが少なく相談相手がいない」という状況も改善することができるのではないだろうか。そのためには、「学びあうコミュニティのコーディネーター」となる「スクールリーダー」の役割は大きく、その力量形成が教職大学院に期待される。

内容

学校を「教員が学びあうコミュニティ」に変える(1)

特集：拠点校の研究会報告(2)

日本教職大学院協会創立記念シンポジウム開かれる(7)

教職大学院全国フォーラムに参加して(8)

スタッフ紹介(9)

ラウンドテーブル予告(10)

特集：拠点校の研究会報告

この秋も、教職大学院の拠点校の公開研究会が、いくつもの学校で開催されました。学校における協働の実践の展開を確かめ、また、その実践と研究をより広い、公的な（パブリックな）交流へのひらく機会として重要な意味を持っています。今回は、丸岡南中学校・福井大学教育地域科学部附属特別支援学校、附属幼稚園の公開研究会の報告です。

自主研究発表会を終えて

坂井市立丸岡南中学校 鈴木 秀卓

教職大学院を修了し、はや1年が経とうとしております。教職大学院の先生方、スクールリーダー養成コースの先生方、そして教職専門性開発コースの皆様方、いかがお過ごしでしょうか。また、一緒に勉強させていただきました1期生の皆様方、ご無沙汰しております。

さて、本校では、今年度も11月に自主研究発表会を開催いたしました。お忙しい中、多くの皆様にご参会賜りましたことを心より感謝申し上げます。

今年度の私は、校務分掌上、生徒指導を担当しており、2年間務めた研究主任を退きました。したがって、今年度は、新研究主任のもと、新研究主題による研究がスタートしたわけであり、とはいうものの、3年次を一括りと

した昨年度までの取り組みを継承し、さらに生徒の学び合う姿を深化させようという考えから、新研究主任のもと今年度の本校の研究主題は、「学び合う環境の創造」と決定しました。

今回の研究発表会では、3本の授業（数学科・技術家庭科・社会科）を公開授業としました。授業をつくるにあたり、教職大学院から松木先生・長谷川先生・淵本先生の各先生方に足をお運びいただき、度重なる授業検討会を開催し、各教科の士気の向上は、この上ないものでした。

以下には、自主研究発表会を終えての研究主任および授業者のコメントを記載します。

渡邊研究主任

～自主研究発表会を終えて～

丸岡南中学校では、開校以来3年を一つのスパンとして捉え、自主研究に取り組んでいます。2まわり目のスタートとなる今年度は、これまでの成果・課題を踏まえ、「学び合う環境の創造」という研究主題を設定し、研究をすすめています。その取り組みは、「授業づくりに重きをおいた研究の継続」「教科センター方式を活用した教科指導の研究」「全教職員同士が互いに学び合う協働体制による研究」の3つを柱としています。今回の自主研究発表は、3カ年のスタートということもあり、“今後の取り組みの方向性を示す”という意味合いを持った発表会でありました。3本の研究授業をもとに行った研究協議や参加者から頂いた貴重なご意見は、今後の私たちに、大きな示唆となりました。また、授業中の真剣なまなざしや、無言で清掃に取り組む生徒、あるいは、全教職員が協働して学び合う姿に対して、多くのお褒めの言葉を頂いたことは、私たちにとって大きな励みと自信になりました。



[数学科の授業]



[技術家庭科の授業]



[社会科の授業検討会]

数学科 矢口教諭

～数学科の授業の取り組みから～

今回の授業は、「比例と反比例」の単元の中から比例の利用を取り上げて授業を展開した。長谷川先生を交えての協議の中で、生徒達の学び合いの意欲を引き出すための課題設定ができたと思う。授業全体としては、まだまだ改善の余地のある内容であったが、今回の研究協議で頂いた意見なども参考にして、今後の指導改善につなげていきたいと思う。

技術家庭科 斉藤教諭

～技術科の授業の取り組みから～

今回の授業では、新学習指導要領の内容、東海北陸大会のための準備ということで、試行錯誤の中での展開となりました。松木先生との協議の中で、「中学生として、話し合い活動の中に具体的な数値や例をあげた理論的な発表」を心掛けるよう授業を進めました。教室環境の整備や授業の準備についてさらなる研究を進めていきたいと感じています。松木先生からいただいた、温かい言葉がけやご支援を胸に、より一層充実した授業をこれからも継続していきたいと思います。

社会科 宮川教諭

～社会科の授業の取り組みから～

今回の授業は、「室町時代の主役はどんな人たち？」という題材で、生徒の主体的な学習を促す「探究型」の学習を展開した。淵本先生のご助言を頂き、ストーリー性のある単元を展開することができた。室町時代をあらゆる階層や身分の人々に視点を置きながら学習を進めた。調べ学習をもとに、ホワイトボードを使いながら少人数で話し合い、さらにグループ同士で意見を交換し合いながら、「室町時代の主役」について意見を練り合うことができた。今回の研究協議で頂いたご意見をもとに、郷土の歴史にも目を向けながら、歴史に対する興味関心をさらに高めた授業を展開していきたいと思う。

最後に、ご参会いただいた方々からの感想の一部を記載させていただきます。

- ・学年や教科の枠を越えての協働研究は世界の教師教育の最先端であると思います。教科の専門性を縦糸、他の教科との学び合いを横糸として同僚性が織物のように形づくられているのだと感じました。学び合いは子どもたちだけでなく先生方も同じなんです。
- ・活動的な授業で、生徒の学びを大切にしているということが感じられました。(社会を参観)
- ・メディアセンターも素晴らしいのですが、図書室が学校の真ん中にあり司書の先生の存在も相まって、とても風通しがいい感じがしました。自由な学びの空間がとてうらやましかったです。
- ・清掃の様子、すごかったです。はじめる前に静かに並び、落ち着いた様子で取り組みはじめる、自分たちの与えられた仕事をしっかりこなしている姿もよかったです。
- ・授業、帰りの会、掃除の態度など落ち着いており、大変良く見えました。先生の話を聞く姿勢、まなざしなど特に良く見えました。それが学び合う授業、スクエア活動、どんなところがどう影響しているのか検証して、次の公開研に少しでも示していただけるとありがたいです。すべてが関係して難しいと思いますが、是非よろしく願います。
- ・目標とさせていただきたいと思いました。明日からの活力をいただきました。すばらしい笑顔、あいさつ、清掃でした。

福井大学教育地域科学部附属特別支援学校 第12回 教育研究集会実施報告
スクールリーダー養成コース 政井 英昭
(福井大学教育地域科学部附属特別支援学校研究主任)

平成21年11月27日金曜日、素晴らしい晴天に恵まれた中、「自分らしく生きる学びの創造」というテーマの下、「教育研究集会」を開催しましたところ、沢山の先生方に参加いただきました。ありがとうございます。

当日は、小学部は「あそび」、中学部は「くらし」、高等部は「仕事」という活動形態の授業をご観いただきました。

本校は、来年に開校40周年を迎える知的障害児のための特別支援学校ですが、伝統的に子ども一人一人の実態から教育内容を作り上げる、いわば「手作りの教育課程」を追求してきました。知的障害のある子どもには内容や方法としてもわかりやすく、具体的で、日常でも活かしやすい「生活」を正面に捉えた様々な活動を見ていただき、ご好評を得ることができました。

本校では、研究の進め方として「事例研究」を中心に据えた取り組みを行ってきました。授業がどうであったかを検証するという点では、それぞれの活動の中で、児童・生徒がどういった姿を見せ、それがどういった成長に結びついていくのかといった、個の育ちを読み取ることが大変重要になってきます。児童・生徒の活動の記録を中心に、教師や友達とのやりとり、保護者のコメントなどの記録を、具体的に時系列でまとめながら、成長の筋道を読み取る取り組みを行ってきました。

「事例研究」の指標となるものの一つが「ICFの理念」と考えました。2001年にWHOが出した「国際生活機能分類」ですが、本校では、その翌年から研究部を中心として検討を続けています。

その人の生活のあり様、つまり「生活機能」ということですが、それは「心身機能・身体構造」と「活動」と「参加」の3つに分けて、それらが相互に影響し合って機能しているのとらえられます。それらには、それぞれ「環境因子」や「個人因子」が影響し合い、さらに「健康状態」も関係しており、こうした相互に関係し合う各項目を整理することで、個人の全体像を表現するというのがICFです。

この全体像のレベルアップが、どの項目のどういった内容が相互に関係することでなされたのかを具体的事例で

考えてきました。特に「個人因子」の強みを生かし、「環境因子」を調整することで、「活動」や「参加」のレベルアップがなされるといった考え方を重視しました。このレベルアップは「心身機能・身体構造」もレベルアップさせ、それがまた「活動」や「参加」のレベルアップをもたらし、全体として「生活機能」が向上していくと考えられます。

特に授業の中で「環境因子」をどう調整するのが問題で、本校では今年度は特に、「人」（教師や友達、集団関係など）と「物」（対象物、支援物、空間配置など）を中心に具体的な場面で検討してきました。更に、高等部では「時間」（長さ、頻度、回数、期間など）についても検討し、一人一人にあった「時間割」の設定も行ってきました。

加えて、知的障害児の学習として「適応主義」的な活動ではなく、学習活動自体を自己実現に結びつけるような方法を、「拡張理論」（フィンランドのエンゲストロームが提唱）を参考に事例に則して考えてきました。

別のコミュニティと、何らかのつながり（結び目＝ノット）を持つことができた場合、その結び目の部分に別の価値がもたらされ、そのことで主体のみならず構成員も更なる活動レベルへ向かうことになるといった考え方です。ノットがもたらす働き、つまり「ノットワーキング」と称された方法を用いれば、硬直化した学習活動からより主体を中心とした学習へ転換できるということです。更に、この考えをもってすれば、ICFの「活動」や「参加」のレベルアップできても「ノット」といういわば「環境因子」を設定することで可能であるとも言えるのです。

これまでの事例研究の中で私たちは、個の成長や停滞といった節目を、実践を振り返って発見したり、再確認したり、また、それらの関連を考えたりと、本当に多くのことを学び、それが私たちの実践の武器（実践知）となってきました。

「自分らしく生きる学びの創造」は、後2年続く予定です。次回の研究会にも是非、お越し下さい。もっともっと沢山の人の、生き生きとした児童・生徒の「自分らしく生きる学び」をご観いただきたいと思います。

福井大学教育地域科学部附属小学校 第35回 教育研究集会をふり返って 研究テーマ 「つながり合って育つ ～協働して学びを深める授業をつくる～」

スクールリーダー養成コース 安井 豊宏 (福井大学教育地域科学部附属小学校)

本校では、子どもの姿を語ることで研究を進めている。1時間の授業で見えた子どもの姿を語っていくうちに、その授業の前の子どもたちの様子はどうだったのか、どのように変わってきたのかを分析することにつながっていく。つまり、子どもの学びの変容や子どもたちにかかわる教師の姿についても考えることができるのである。

今年度は、昨年度のサブテーマである「学びのプロセスを探る」ことで見えてきた子どもたちの姿をもとに、「協働して学びを深める授業をつくる」ことに焦点を当て研究を進めてきた。そして、12月4日の研究集会では、公開授業を行い、その授業の中で見えてきた子どもたちの協働の姿を語り合ったり、学団別分科会でミニパネルディスカッションを行い、協働して学びを深める授業について語り合ったりすることができた。

私は、タイルを使ってかけ算の九九を構成する算数の授

業を行った。自分なりの思いでタイルを並べる子どもたち。タイルの並べ方について話し合ったり、その並べ方をもとにした計算の仕方について話し合ったりするなど、子どもたちの協働の場面を見ることができた。授業分科会では、参観者の方たちが見取った子どもたちの姿やご意見を聞きながら、今後の展開をさらに深めることができた。

学団別分科会では、大学や教育委員会の先生方たちのご意見を聞きながら、協働して学びを深める子どもたちの姿やそれにかかわる教師の姿について、多くのことを学ぶことができた。「協働」することで、子どもたちの学びが深まったり、よりよい関係を築いたりすることができることを、今更ながら痛感させられた。

研究集会を終えた今、これまで研究に携わっていただいた方たちに感謝し、今後の研究につながるよう、成果や課題について整理していきたい。

教職専門性開発コース 小出 哲也 (福井大学教育地域科学部附属小学校インターンシップ)

私が学生の際は研究集会に参加しただけで終わった立場から今回はインターンシップということで、一スタッフとして参加することができ研究集会が開催されるまでの期間を見てきました。研究集会が開かれるまでは、連日研究会を開いて、子どもの様子を先生同士で語りあったり、授業で使う教材が子どもに適しているか検討を繰り返したりと先生方の夜遅くまで仕事をされる姿に感心させられました。研究集会を開催するのは並大抵の苦労ではないと感じました。研究集会が近づくにつれ、インフルエンザで学級閉鎖が相次ぎ当日の授業内容が変更してしまうということもありましたが、先生方の熱意により研究集会当日は、授業の中で子どものいきいきする姿を見て取れました。今回の研究集会を通して先生方の「協働する姿」

がとても重要だということを感じました。学年や教科の壁を越えて、お互いが授業を公開し合い、子どもの様子を語るということは、とても重要なことだと感じました。先生の協働なくして子ども同士の協働する姿はないと思いました。

さらに研究集会が終わってから冬のバズセッションということで、小グループに分かれての実践報告会にも参加させて頂きました。この実践報告会から教師は常に成長していかなければ、「真の子どもの学び」にはつながらないと感じました。子どもが学び続けるように教師自身も常に学ぼうとする姿勢が大事だということを実感し、今後の自分のインターンシップに活かして自分自身の成長につなげたいと思っています。

福井大学教育地域科学部附属幼稚園研究集会

福井大学教育地域科学部附属幼稚園 林 幸恵

晩秋とは思えぬ寒さ（最高気温は 10℃でした）の中、本年度の研究集会が 11 月 3 日に開催されました。参加者は、大学生も含め、約 250 名程でした。

本年度は、研究テーマを昨年度に引き続き「伝え合うひびき合う～遊びの中で友達とかかわる姿をみつめて～」とし、日々の保育の中で、幼児の言葉、動き、表情から伝え合いひびき合う姿を追い事例を書いていく中で、幼児の成長を捉え、援助や環境構成の在り方を探ってきました。

研究集会当日、午前の保育参観では、年長児が協同的な遊びとして「むしむしぼうけんランド」を開きました。大



きなバルーンの中で洋服屋さんをしたり、遊戯室を使つての虫の大迷路をしたり、大きな虫の的当てをしたりしました。「むしむしぼうけんランド」を開くために、年長児自らが計画を立て準備を進める中で、友達と協力して一つのことをやり遂げる達成感を味わったように思います。また、友達の意見に耳を傾けお互いによりよいものを作ろうと友達と心を通わす心地よさも味わったと思います。また、年中児や年少児も年長児のダイナミックなむしむしぼうけんランドにお客さんとして参加する中で、友達と遊ぶ楽しさを味わい、思いを伝え合うことの心地よさも味わっていたように思います。また、年中児では、のりものごっこやショーごっこ、年少児では、転がしごっこやピクニックごっこをする中で、同年齢の幼児同士での伝え合いひびき

合う姿も見られました。また、遊びの後には、各学年に応じた形態を取りながら遊びの振り返りの話し合いの時間も参観していただきました。また、午後からは分科会、全体会が行われ、白梅学園大学の無藤隆先生から全体高評をいただきました。また、その後の講演会では、文部科学省の篠原孝子先生が、午前中の保育の中から具体的事例を挙げながら幼児教育が目指すものが何かをわかりやすく講演してくださいました。

参観者の感想から「子ども達が主体的にのびのび遊んでいた。」「遊びの振り返りでは、集中して聞き、自分の思いを伝えている姿に感心した。」「先生方が一人一人の幼児の気持ちに寄り添った関わりに関心した。」などがあげられていました。

この 2 年間の取り組みで、幼児が自分らしさを出す姿、一つのことに自然に感じ合う姿、思いを伝え合い生き生きと友達と遊ぶ姿、心がひびき合い通じる姿をたくさん見ることができた幸せを感じています。この姿こそが私たちの求める「伝え合う ひびき合う」姿なのだろうと思います。そして、教師が具体的な幼児の姿から、幼児理解、保育構想、保育実践を共有化してきたことが、教師の「伝え合うひびき合う」姿であり、成長なのでしょう。幼児の成長を支える研究となるために、今後も目の前の幼児のありのままを受け止め、幼児の立場に立って研究を続けていきたいと思っています。



日本教職大学院協会創立記念シンポジウム開かれる

2009/12/13

福井大学教職大学院 寺岡 英男

12月13日午後1時半から、学会館で日本教職大学院協会創立記念シンポジウム「教職大学院の成果と課題－更なる発展を目指して－」が開かれた。会場はほぼいっぱいの盛況だった。シンポジウムの趣旨は、教職大学院発足2年になる中で、この間の経験をふまえ、その使命を果たしていくために解決すべき課題と方途を議論することにより、更なる発展・充実を図る機会とするというものだった。

発言者は、梶田叡一（協会長）、藤原章夫（文科省高等教育局大学振興課長）、横須賀薫（元中教審ワーキンググループ主査）、広部正紘（福井県教育長）、向山行雄（全国連合小学校長会長）、そして天野郁夫（東大名誉教授）の各氏。福井県教育長の登壇は全国都道府県教育長協議会の代表としてであり、福井の教職大学院と県教育委員会、学校との協働のこの間の取り組みが評価されたことの表れ

だと言える。

この中で横須賀薫氏は、教職大学院の制度設計を主導した立場から、教職大学院の制度上の改善課題として、学校を単位とする教育研究・教員研修の再生と、教科研究の充実を強調していた。広部教育長は、県教委と福井大学教職大学院との連携の取り組みを紹介しながら、今後の期待と課題として、学校拠点方式の継続と教員の専門性スタンダード開発による質保証などを挙げた。天野氏は、教職大学院が修士課程の大学院としてあることや専門職大学院制度、それがなぜ「研究科」なのかなど、まだ日本では曖昧な部分を残しており、大学院教育の時代に入ったいま教員養成システムの全体的・総合的な見直しの中で教職大学院を「成功」させていく重要な課題があるという話であった。

同日、教大協・教職大学院連絡協議会も開催される

同じ12月13日の午前中、一ツ橋の学術総合センターで、教大協・教職大学院連絡協議会が開かれた。これは、教職大学院の認証評価機構として独自に立ち上げる「教員養成評価機構」を翌14日に申請を行なうのに先立って開かれたもの。機構の方から、この間の全体説明と、評価専門部会からの評価の規定、認証評価基準WGからの基準案の説

明が行われた。併せて各教職大学院からの意見交換が行われ、福井の方からは専任教員の入れ替えの時期に当たり、学部教員のローテーションをしている実務家教員の人事における「期限」が壁となっており、その改善が求められていることについて発言した。

教職大学院全国フォーラムに参加して

福井大学教職大学院 上野 澄子

12月19日(土)奈良市の奈良教育大学において、教職大学院「教育実習」全国フォーラムが開かれ、参加した。昨年度末3月の教職大学院GPフォーラムでは、同大学にアメリカからの講師も招いて、教育実習と現職教育に関するシンポジウムを開催した。これに引き続いて2回目の参加となった。

今回のフォーラムはグループ協議を中心とし、それぞれの教職大学院における実習の現状と課題について報告し合った。各大学院の教員同士でより深い意見交換が行われ、本音でのびやかな議論が展開される場となった。

日程は、開会行事の後、午前中いっぱいグループ協議が続き、昼食時も和やかに話し合いが進められた。午後は、全体会で、各グループから協議内容の報告があった。続いて、奈良教育大学教職大学院の実習内容と評価の取組についてプレゼンテーションがあり、それを基に全体協議を行って日程が締めくくられた。

参加したBグループは、宮城教育大学、聖徳大学、静岡大学、福井大学、福岡教育大学、奈良教育大学の6教職大学院の教員で構成される分科会となった。ここで話題となったのは、スクールリーダー実習の特色であった。現職教員の院生が大学院修学休業制度により2年間学校現場を離れてフルタイム大学院に通うケース、1年間のみフルタイムで通い2年目は現任校に戻って研究するケース、退職して2年間の幼児教育コースに入学して来るケースなど、どの教職大学院も独自の制度設計を行っている。

福井大学以外の教職大学院では、実習は年間を通じてではなく、一定期間受け入れ校へ出向く。週1回のみで数週間の実習を行ったり、修了までの2年間に複数の学校種を経験したりするなど、さまざまな実習のスタイルがある。ストレートマスター、スクールリーダーともに在籍校以外の学校へ出かけて実習する形を取っている大学が多く、実習生も受け入れ側もそれぞれ苦労があるという。

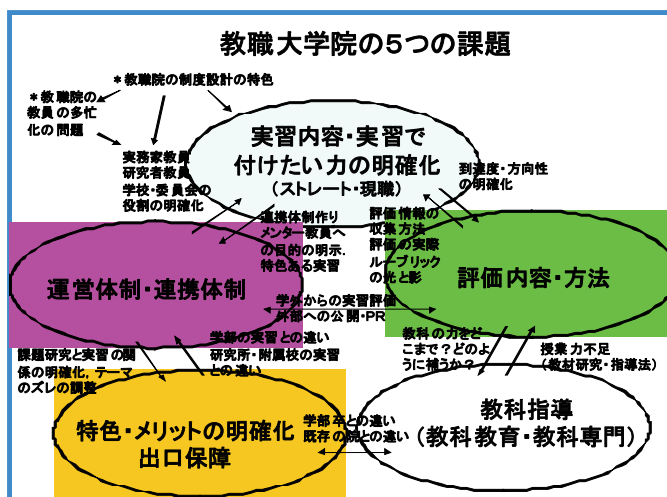
一方、福井大学教職大学院の実習は、学校拠点で履修が行われる。教職専門性開発コースでは、長期のインターンとして学校に入り、1年間を通じて教師の仕事の総体を学ぶ。一方、スクールリーダー実習は3つに分けられている。実習Iでは、在籍校の研究を企画運営することを中心を自

校で行う。実習IIは他校の研究支援協力で年間6回程度かわり、実習IIIは若手教員を支えるメンターシップの働きを位置付けている。いずれも1年次に、通年で行われる。

フォーラムの分科会で、スクールリーダー実習の課題に関して、研修機関等での研修と教職大学院の実習の違いを明確にする必要性があげられた。また、実務家教員と研究者教員の連携は重要であり、教育委員会とに密接な連携を図る際には、学校や教育行政ともにパイプを持つ実務家教員の出番である、という点で意見が一致した。

さまざまな大学との情報交換の際にいつも感じることは、どの大学にも持ち味があり、それぞれ工夫したカリキュラムを作っていることである。「福井大はユニークな取組をしている」と評判があるものの、本学の特長といえる学校拠点方式については、そのデザインやメリットがなかなか理解されない面もある。逆に、このようなフォーラムで顔なじみとなった他大学の方にはよく理解してもらっており、説明に窮しているとサポートを得られることさえある。

全体会でのグループ協議の報告をまとめたものが下図(提供：奈良教育大学教職大学院教授 小柳氏)になる。開設2年目の全国の教職大学院は、どこも課題を抱えながらも、情報交換の場を設け、独自性を保ちつつ解決に向けての方策を探っている。教員養成6年制の動向を見据えながら、課題解決へのアプローチをも、さらなる発展への原動力に変えることができると考える。



Staff 紹介

木村 優 きむら ゆう

昨年 11 月より研究員として着任しております木村優です。教職大学院のスタッフの一員として院生の皆様と拠点校の先生方が取り組んでおられる実践と研究を支援できること、大変強く大きな喜びを感じております。私はこれまで首都圏にある複数の中学校・高校で授業観察をおこない、先生方のお話を聴き取ることで、教職の専門性に関わる実践研究をおこなってきました。ここでは私がどのような関心をもって研究に取り組んできたか、被教育体験と研究活動をいくつかふまえながらお話しようと思います。

先生が自分のことを語ること 私は大学受験予備校で自らの人生観を大きく転換させた一人の英語講師と出会いました。なぜその英語講師との出会いが私の人生観を転換させたのか、振り返って考えてみると、彼が毎回の講義で頻繁に自分のことを語っていたことに気づきました。その内容は趣味や嗜好、子どもの頃や学生時代の話、講義当日に起こった出来事、時事問題に対する意見や批評、自らの価値観など、多岐に渡っていました。これらのお話には示唆や暗示が含まれていたように思われ、私はその示唆や暗示を受けて、生きることの意味を考え、日常に潜み確かな変化と幸せ（小説家の村上春樹はこれを「小確幸（小さいけれど確かな幸せ）」と名づけています）に気づき、学ぶことの楽しさを知って学習にのめり込んでいったのです。人が自分のことを他者に語ることを心理学では「自己開示」といいます。このことから、授業中に教師が生徒に自己開示をおこなうことに何らかの教育的意味や機能が含まれていると考えるようになりました。そして、大学院に入学してから公立中学校の先生 3 名の授業を長期間観させて頂き、授業中に先生方がおこなっておられる自己開示の内容や様式、生徒に及ぼす影響を探求していきました。

感情に満ちあふれた仕事 授業を観て、先生方が自分自身に関してどのような内容を語っておられるか記録していたところ、先生方は笑顔を浮かべて生徒を褒めたり、楽しそうに授業をなさったり、ときに無礼な態度を示した生徒を叱ったり、呆れた表情や困惑した姿を見せたりと、自分の内側にある様々な感情を生徒に開示しておられたことに気づきました。そこで、研究に協力してくださった佐藤先生という方に「教師が感情を開示することにどのような意味があるのですか」と尋ねたところ、佐藤先生は「教師の最大の喜びは子どもの成長でしょう。それを見たら嬉

しいじゃん。逆に、本当に教師が怒りをさらけ出すってことは基本的に意味がある。そりゃ無闇に怒ったらバ

カだし、ただのキレてる先生になるだけだから、本当に教師はタメが必要っていうか、そう簡単にキレたら効果はない。それに教師は子どもにとってモデルだから、こういうときは怒った方がいいって、怒るべきときは怒るべきだ」と話してくださった。私はこのお話に感銘を受けるとともに、教師の仕事、授業がいかに感情に満ちあふれているかを実感しました。

専門的発達と感情的実践 現在、私は高校の先生方へのインタビュー、授業観察調査を通じて、授業中の教師の感情経験と感情表出についての研究を進めています。感情経験に関するインタビュー調査からは、特に喜びや楽しさなどポジティブな感情は先生自身の柔軟な認知と創造的思考を導き、悔しさや苦しみといった自己意識感情が先生方の授業中、授業後の省察を促し、実践を改善しようとする動機づけを導くことが示されています。また、インタビュー調査で先生方から「授業中の感情を聴かれることで、自分が授業中に何を感じ、何を大事にしている、どんな課題があるのかよくわかりました」とのお話を頂きました。つまり、教師は授業中、経験した感情に基づいて半ば無意識的に実践をおこないながら、その感情を伴った出来事を内省、反省することで実践の問題点を把握し改善していくといえます。

院生の皆様や拠点校の先生方のお話、実践記録からも生徒の成長に対する喜び、授業をおこなうことの楽しさ、あるいは生徒との人間関係における悩み、授業が上手くいかないことへの苦しさや悔しさが聴き取れ、読み取れます。これらの感情経験全てが皆様の専門的実践と発達、それらの基盤となる実践の省察に活かされているのだと思います。私も自らの実践で湧き起こる感情を意識化し、実践を省みながら、教職大学院に関わる皆様と共に成長していきたいと思っております。



*実践し 省察する コミュニティ

*Fukui Round Tables
Spring Sessions 2010
For Reflective Practice,
Organizational Learning,
and Reflective Institutions
of Teacher Professional Development*

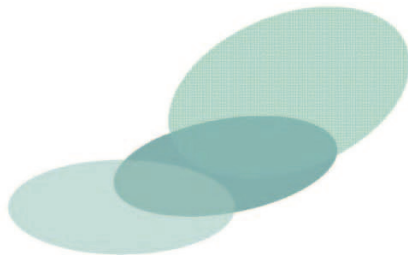
Communities of Practice and Reflection since 2001

学び合う教師のコミュニティを培う

日本の教師教育改革のための福井会議2010
2/27(sat) 11:00-17:00
福井大学教育地域科学部 1号館

学校改革実践研究福井ラウンドテーブル

2/28(sun) 8:50-14:40
福井大学教育地域科学部 1号館



探究する学びを実現する教師 教師を支える教職大学院

教師の実践力を培う学校拠点の実践研究
学校と大学、実践と研究を結ぶ
新しい実践研究組織とそのネットワーク

2010.2.27-2.28

福井大学大学院教育学研究科
教職開発専攻（教職大学院）

日本教職大学院協会/共催

福井県教育委員会/後援

第2版 2010.1.22（プログラムの変更等があります。）



2/27 (sat)

学び合う教師のコミュニティを培う

For Professional Learning Communities

日本の教師教育改革のための福井会議 2010

福井大学教育地域科学部 1号館

Session I

日本における教師教育改革： その必要性と展望 11:00-11:50

鈴木 寛 (文部科学副大臣)

修士段階における教員養成の実現、一年間の長期教育実習、現職教育の充実。新政権のマニフェストにおいて提起されている抜本的な教員養成改革の構想、その必要性と展望について、その中心に立つ鈴木寛副大臣から提言を受けます。

Session II

授業研究と Lesson Study： 教師が学び合う学校をつくるために 13:00-14:20

Catherine Lewis (Mills College)他

学校での協働研究の要としての授業研究。教師の実践力を培い、学校での教師同士の学び合うコミュニティを培う実践研究をどう実現していくか。アメリカでも進みつつある学校拠点の授業研究の展開を、その第一人者であるキャサリン・ルイスさんに報告していただき、日本での取り組みと照らし合わせて考えていきたいと思います。

Session III

二つのワークショップ： 教師の協働的な力量形成を支える 14:40-17:00

Zone A 学校における協働研究 その展開と組織を問い直す

学校において授業づくり・学校づくりのための協働研究をどう進めていけばいいのか。一人ひとりの教師の個性的な実践と協働研究の展開をどう支えていけばいいのか。長期にわたる協働研究の蓄積を持つ学校の取り組みから学びたいと思います。(5つの分科会)

堀川高校 (京都)・伊那小学校 (伊那)・カリタス小学校 (川崎)・金岡中学校 (大阪)・信濃教育会 (長野)・至民中学校 (福井) 他
福井大学教育地域科学部附属幼稚園・小学校・中学校・特別支援学校

Zone B 教師の専門性形成を支える： Professional Learning Communities

①福井大学の実践からの報告： 学校拠点の協働研究と長期インターンシップを中心に (B全体)

②教職大学院の取り組みと大学院スタッフの力量形成 (小グループでの実践交流)

学校での教師の協働研究を支えるには、それを支える側にも協働の力量形成のサイクルが必要となります。教師教育を担う大学のスタッフの協働的な力量形成をどう実現していくのか。各大学での取り組みを、大学を越えて小グループに分かれて紹介しあいます。

2/28 (sun)

学校改革実践研究福井ラウンドテーブル 2010

8:50-14:40

実践の長い道行きを語り 展開を支える営みを聞き取る

福井大学教育地域科学部 1号館

地域や職場で自分たちの実践をじっくり跡づけ、その省察をふまえて実践を編み直していく。地域・職場を大人同士が実践を通して学び合う協働体 (コミュニティ) に変えていく。その中で一人ひとりが、省察的で主体的な実践者としての力を培っていく。そうした地道な取り組みが少しずつ蓄積されてきています。試行錯誤を重ねながら大切に進められてきているそうした取り組みを、より広く伝え合い、じっくり展開を聞き取り、学び合う場を作りたいと思います。

小グループで実践の展開をじっくり聞き合います。

(6人ぐらいの小グループを進めます。1つの報告について1時間20~40分程度を予定しています。)

実践記録を土台に実践の歩みをじっくり語っていききたいと思います。心に残っている場面。言葉、表情、行為。その時々を感じていたこと。ふりかえる中で見えてきたつながり。話し合いと記録づくりの中ではじめて気づいたこと。いま改めて跡づけ直して考えていること。語られる展開に耳を傾け、活動の場面を共有し成長のプロセスを探っていききたいと思います。実践の過程をじっくり語り、聞き合う場、実践を共有して協働探究できる関係がより広く培われていくことが、その後の実践への問いの深まりを支える拠り所になると思います。

学校改革実践研究福井ラウンドテーブル実行委員会
福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻 (教職大学院)

〒910-8507 福井市文京 3-9-1

E-MAIL: dpdtfukui@yahoo.co.jp URL: http://www.fu-edu.net/

●申し込み● ①氏名 (ふりがな), ②所属・役職, ③メールアドレス, ④電話番号, ⑤参加日 (両日・2/27のみ・2/28のみ) なお 28日のセッションは小グループによる討議のため全日参加が前提です) を明記の上、2/13(土)までに dpdtfukui@yahoo.co.jp へお送りください。2/28の実践報告者を募集しています。申し込みの際にお知らせ下さい。

福井県教育庁嶺南教育事務所 第 15 回教育研究発表会

2/4 (木)

13:30-16:35

会場 福井県教育庁嶺南教育事務所
〒917-0241 福井県小浜市遠敷 2 丁目 205
TEL 0770-56-1302

福井県教育研究所 第 26 回 研究発表会

会場 福井県教育研究所・福井県立青少年センター
〒918-8045 福井市福新町 2505
TEL 0776-22-6891

2/18 (木)

9:30-15:30

2/27 (土)

学び合う教師のコミュニティを培う

日本の教師教育改革のための福井会議2010
2/27(sat) 11:00-17:00 福井大学教育地域科学部 1 号館

2/28 (日)

学校改革実践研究福井ラウンドテーブル

2/28(sun) 8:50-14:40 福井大学教育地域科学部 1 号館

Schedule

2/6 sat 入学者選抜試験 (第 2 次) (9:00-)

2/13 sat 長期実践研究報告会 (9:30-12:30)

2/27 sat -2/28 sun 実践研究福井ラウンドテーブル

3/23 tue 学位記授与式

[編集後記] 2010 年最初のニューレターです。教師教育の抜本的な改革に向けてのさまざまな動きが進むこの 2010 年。福井大学教職大学院にとっても、これまでの積み重ねが問われる、重要な年になると思います。長い実践の展開とその省察をそれぞれの場で進め、互いに交流し学び合う。そうした省察的な実践とそのコミュニティを自覚的に培っていく。教職大学院のプロジェクトの基本に忠実に、それをこの改革の展開の中でさらに広く分かち合う可能性を探る年にできたらと思います。(Y)

教職大学院 Newsletter **No.18**

2010.01.25 発行

2010.01.25 印刷

編集・発行・印刷

福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻

教職大学院 Newsletter 編集委員会

〒910-8507 福井市文京 3-9-1 dpdtfukui@yahoo.co.jp